
神々の賽 ~ 対の女神 ~

トワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々の賽 ー 対の女神 ー

【Nコード】

N1249W

【作者名】

トワ

【あらすじ】

列強ひしめく大陸の中でも、最大最強を誇るレナーテ王国。そこにはかつて『シャンキルの女神』と謳われた美貌の王女がいた。その王女を母に持つ、フィアナとアルティナ。双子の姉妹は、母と同じ予言をあたえられたことから、人目から隠されていた。年頃になった彼女たちを待ち受ける、運命と恋 のお話です。

プロローグ

「殺してしましましょう」

まるで野花でも摘みに行くような軽やかさで、男はいった。

室内が一気に緊張する。

それまで、空気の重さに耐えかねてか、感情を晒すことを恐れていたか、あるいはその両方か　　瞼を閉じていた男たちは、殴られでもしたように一斉に目を開けた。その色がそれぞれ異なるように、男たちの瞳はそれぞれの感情をのせている。ただ、向かう先は同じだった。

怒り、驚き、不安といった負の感情を一身に集めた男は、萎縮するどころか逆に、それを待っていたようだった。

「さすれば、憂いは消えまする」

男の声は穏やかだった。

しかしその発言は、穏やかならぬ空気呼んだ。

「ほう、たいしたものだ。災いになるやもしれんというだけで、まだ目も開いておらぬ赤子を殺すか」

侮蔑を含んだ声でそういった男は、目に怒気と殺気をみなぎらせていた。

戦場でしか見られない男のその気配に、あるものは臆し、あるものは不安の色を見せているというのに、射殺するような目に見据えられても、対する男はまったく動じなかった。

「さようです。確かに、災いになるかならないか、いまはわかりません。ならなければ結構。ですが、なつたとき、どうなさいますか？ われらはすでにそれを経験しております」

怒気を隠さぬ男が、苦い事実を聞かされて眉間に皺を寄せる。

「それに……生きたとしても、お幸せにはなれません」

「なぜ、そういい切れる」

「たとえ災いにならずとも、災いになるかもしれないだけで、われらが国と民には不安が付きまとうことでしょう。その存在が、忌まれ遠ざけられるは必至。災いになればそれこそ、あのとき殺しておけばよかったと思われるのです。どちらにしても、お気の毒ではありませんか？」

「それが殺す理由になると思うのか？」

「十分かと……」

平然といい放つ男に、眉間に深い皺を刻んだ男は、抑えた声で訊ねた。

「百歩譲って受け容れたとして。……誰が手を下すんだ？ 俺か？ それとも何も知らない奴にやらせるか？ 誰が、赤子殺しの罪を背負うんだ？」

「お許しができれば、わたくしが……」

「貴様、正気か？」

「無論」

「ひとではないな。ひとの成りをしているが、貴様はひとではない」

「これは……国の未来を背負って立つお方の言葉とは思えませんな」

それまで、春風のように穏やかだった男の声はいま、濃い嘲りを含んでいた。

「ひとであることに固執して、成すべきことを拒否なさる、か。ご自身は守れても、国は守れんでしょうな」

「黙れ！ このくそがきが！」

それを聞いた男は、もはや怒りを抑えることを止めたようだった。怒声とともに、椅子を後ろへ蹴り倒す。

全身から怒りを放出させた男は、大またで男に歩み寄ると、その胸倉を掴んだ。

「阿呆がわかった風な口を利くんじゃねえよ！ 罪もねえ子供を殺して国が助かるか？ どの面下げてお前は自分の子供に会うんだ？ 赤ん坊を殺した手で、ガキの頭を撫でんのか？ 神の前でなんていうんだ？ すべては国のためでした、とでもいう気か？ そんな薄汚い野郎がのさばる国を、神々が祝福すると思うか？ そう思ってんならお前は馬鹿だ。とんでもない大馬鹿だ。いいか？ お前は国を守るんじゃないやねえ、滅ぼそうとしてるんだよ。お前みたいな野郎が国を腐らせてくんだよ。つまんねえ占いだか予言だかに振り回されやがって」

「やめよ」

鋭い叱咤の声が、激情に染まる空気を切り裂いた。

男が、怒りで底光りする目を、横槍を入れた相手に向ける。

穿つような視線を向けられた相手は、怯むどころか逆に、鋭い目で男を睨み返した。

「やめよ。陛下の御前である。そのくらいにしておけ」

いわれた男は「ちっ」と舌打ちし、胸倉から手を離した。

室内は、ようやく静けさを取り戻した。が、緊張は増すばかりだ

った。

争いをとめた男が、意識と視線を横に滑らせる。そこには、男が忠誠を誓い、唯一膝を折る人物が座っている。逞しい体躯に、獅子のたてがみを思わせる頭髪。王者と呼ぶにふさわしい威厳と風格を備えた主はいま、何者をも従わせる紫の瞳を隠していた。

「陛下……」

重々しい声で男はいった。

すべての視線が主に集中する。しかし、主は微動だにしない。

「……ご決断を」

促す男の声に、主はようやく反応した。
固く閉じられていた瞼が開く。

主の瞳が示すのはどちらなのか

男たちがそれを確かめる前に、言が落とされた。それは短く、抗えない強さでもって、男たちの前に放たれた。

プロローグ（後書き）

よろしくお願いします。

1 日常

「まったく、お前は 気が小さいにもほどがあります。やられたらやり返すくらいの気概を持ちなさい。これだけ立派な体をしていて、いったい何を恐れるというのです」

若い女は憤りを隠さず、身の丈を越す相手を叱りつけていた。優しい風貌をしているが、白い肌には薄く朱がさし、淡い緑の瞳にきらきらと、怒りと陽光を反射させている。

「オーカー、聞いているの？」

「……」

感情あらわな瞳をひたと向けられている相手は、黒曜石のようなつぶらな瞳を彼女から逸らすばかりだった。

「まあ、いまに始まったことはありませんが……」

その様子を遠目から見ていたサラは、ため息とともに口にした。

「馬を相手に説教とは、わが姉ながら」

「尊敬する？」

サラは横を向き、言葉を継いだ人物に目を移した。それまで人馬のやりとりを見ていた紫水晶のような瞳が、いたずらな光をたたえたまま、サラに向いていた。サラは目線をわずかに下げ、微笑んだ。つややかでゆるく波打つ黒髪が、敷布の上に広がっている。彼女の主は、片腕を枕に寝転んでいた。

「フィアナ様、少々違います。見上げたもの、とでもいいでしょうか。無駄を承知であるようなこと、わたしにはとうてい真似できません。まあ、真似たいとも思いませんが……」

呆れるような、諦めたようなサラの声に、

「ふふっ」

という笑い声が重なった。

「アルティナ様？」

サラはいまひとりの主、アルティナを見た。寝転ぶフィアナのすぐ傍らで、片膝を立てて座っている。双子の姉フィアナとは対照的な、まばゆいばかりの金髪が、その背中で揺れていた。

「ティア？」

フィアナが双子の妹に紫の瞳を向ける。

アルティナが応えるように、深緑の瞳を合わせた。

「心配だわ。オルガったら、そのうち壁や柱にまでお説教するようになるんじゃないかしら？」

露ほどの不安もない声でアルティナがそういうと、三人は一緒に笑った。

「まあ、その心配は先に置いておくとして」

フィアナが笑顔のまま、視線を人馬に向ける。

「そうね、オルガの気持ちもわかるけど、あれでは逆効果ね」

アルティナが頷くと同時に、フィアナは立ち上がった。

「オルガ！ お説教はそれくらいにして、こっちにいらっしやい！」

「オーカーときたら、本当に歯がゆくて仕方ありません。素晴らし
い脚と体に恵まれているというのに、あの臆病さゆえ、すべて持ち
腐れます」

オルガは悔しさを滲ませる。

一方、お説教から解放された馬はいま、緑豊かな広大な敷地を駆
け回っていた。気ままに緩急をつけ、あたりを走り回るさまは、力
強く優雅であった。

「さすが、シスタ産の名馬ですわね」

サラが感心したように声を上げる。

「そうね。ああして走り回っていると、スレイプニルとグレイプニルとそう変わらないわね。ちよつと神経質で、ずいぶん臆病なだけでしょ?。」

と笑いかける黒髪の主を、オルガは恨めしげに睨んだ。

「それが大層厄介なのでございます。人見知りをする、知らない人間を怖がる、果ては犬まで怖がる始末。これでは使い物になりませんでしょう?。」

「どうして? オルガには慣れているし、ちゃんと乗せてくれるじゃないの。わたしなんか近づくと、いまでも目を逸らされるわよねえ? ティア」

「そうよ、オルガ。それに、初めて来たときのことを思えば、格段の進歩だわ。ゆっくり色々なことを覚えさせればいいわ」

アルティナの言葉に、サラが思い出したように笑った。

「あれは貴重な体験でしたわ。失神しそうになった馬、というのを初めて見ました。いきなり脚から崩れてゆくので、毒でも盛られたのかと心配しましたけど……それが緊張からだとは、思いもしませんでしたわ」

「皆そうよ」

その後の喧騒を思い出したのか、フィアナが微笑んだ。

「ほんと、あのときから比べれば大した進歩だわ。オルガ、慣れよ、慣れ。時間をかけて、あらゆることに慣れさせていくしかないわ。頑張りなさい」

「フィアナ様もアルティナ様も、他人事だと思って」

『だって、オーカーはオルガの馬でしょう？』

双子の主はくるりと瞳を輝かせ、同音同句にそういった。

「使い物になるのにいったいどれくらい時間がかかるのか、考えるのも空しいですわ」

憂鬱そうにいうオルガは、次の瞬間、はたと気付いたように顔を上げた。

「だいたい、わたしの仕事はおふたりのお世話であって、馬の世話ではありません」

「お小さい頃ならそうでしょうけど、早や、十七になられたフィアナ様とアルティナ様は、もう手もかからないでしょう?」

「何をいつてるの!」

オルガは妹をきつと睨みつけ、次いでふたりの主に目を向けた。じつくりと見つめ、眉間に皺を寄せてから、おもむろに口を開いた。

「フィアナ様! なんですか、その格好は。アルティナ様もです! 男のように片足を立てて座るなど、市井の娘でもそのような恥ずかしい格好はいたしませんよ。そろいもそろってまあ。王族の令嬢がそのようにはしたなく、だらしない姿を晒してはなりません」

にわかに自分の仕事を思い出したオルガは、馬に向かうときよりさらに厳しくふたりの主を戒めた。

「ここにはだれも入ってこられないから大丈夫よ」などというものなら、「内での習いが外に出るのです。いったい何度いえばわかるのです」と返ってくるのは間違いない。聞くこと数千回を下らないこの言葉を避けるため、ふたりはおとなしく従った。

居ずまいを正す主たちを見届けると、オルガはその矛先を妹に向けた。

「サラ、お前もお前です。己の務めを果たさなければ駄目でしょう

」

フィアナとアルティナは顔を見合わせ、おどけるように肩をすくめた。

「よろしいですか、緊張感をお持ち下さい」
常に、どこかに、人の目があり、耳があるとお願いください

いつものように、説教のくくりの文句に差し掛かったときだった。
オルガが突然立ち上がり、森に向かって怒鳴りつけた。

「ダブル！ お前は何を食べているの！」

いいながら、急ぎ足で森の中へ入ってゆく。

「まあ……いいところだというのに、姉さんも忙しいこと」

サラは気の毒そうにその後姿を見送り、フィアナとアルティナは身を乗り出し、木陰に見え隠れする人馬を探した。

馬は、ところどころに大きな白い花をつけた、濃い緑の葉を繁らせる木に顔をつっ込んでいた。熱心になにやら食^はんでいたが、ピクリと耳をふるわせたかと思うと、繁みから顔を引き抜いた。そしてオルガを見つけるなり、彼女に突進してきた。

それは一見、襲われるのではないかと知らぬものに誤解を抱かせる勢いであつたが、馬は脚力の強さを見せつけるように急停止すると、オルガの顔に自分の長い顔をこすり付けた。

オルガはよろめいたものの、踏ん張りながら、人懐こい葦毛の馬の首を撫でてやった。それから、長い顔を自分に向けさせ、しかめ面を作った。

「こら。なんでもかんでも目に付くものを食べてはいけませんといつてるでしょう？ 毒でもあつたらどうするの？」

馬は白い花を食^はんでいたのだった。

「お前はほんとうによく食べるわね」

アルティナはその食欲を感心しながら、三つ目のりんごを頬張るダブルの背を撫でた。

葦毛の馬は、大好きなりんごをもらった上、撫でられて大層ご満悦の様子である。

「なんでもかんでも食べすぎです」

オルガは苦い顔をする。

「十分に餌を与えているというのに、他の馬の餌を横取りする、人にはねだる、外へ出れば目に付くものを食べるなど まったく、その食い意地をなんとかなさい。そのうち毒にあたって死んでしまおうよ」

心配からくるオルガの説教を、ダブルは聞いているのかいないのか。

栄養たっぷり、他の馬に比べてふた周りほど立派に育った馬は、『もう一個、もう一個』と太い首を使って、アルティナにねだっていた。

「そんなに食べたならお腹をこわしますよ!」

おねだりが成功したダブルを見て、オルガは声を張り上げた。

「アルティナ様も、そう簡単にお与えにならないでください」

「ごめんなさい。でもダブルには勝てないわ」

ダブルには、巨体に似合わぬ可愛さと、人懐っこさ、という強力な武器があった。

だがオルガにいわせると、その武器も表現が変わる。

「ダブルの図々しさの五分の一でもいいですから、オーカーに分けてやれませんかしら？」

「それは無理というものよ、姉さん」

間髪をいれずに答えたサラは、オルガに睨まれた。
フィアナが笑った。

「お前も心配が絶えないわね、オルガ」

「まったくですわ。そもそもこの二頭は、フィアナ様とアルティナ様に献上されたというのに、どうしてわたくしが面倒をみなければいけないの？」

フィアナとアルティナは、『何をいまさら?』という顔をオルガに向けた。答えたのはサラだった。

「フィアナ様にはスレイプニル、アルティナ様にはグレイプニルと、ご乗馬があたりですもの。他のものも乗馬は決まっていますし、エマーンやラリサには、オーカーとダブルはまだ扱いきれないでしょう? なんといつでも癖が強すぎますから」

そんなことは百も承知だった。ただ、愚痴ることと発散させたかっただけなのだが、オルガは、続くサラの言葉で渋面をつくることになった。

「それに、親の尻拭いは、子がしませんとね?」

どこでどう探してくるのか知らないが、オルガとサラの父は、とんでもない馬を見つけてきては、娘の主たちに献上するのだった。

並みの馬では、彼女たちの主には物足りないだろう

という、まったくもって余計なお世話を、言に違えず実行している。扱いにくく、一癖も二癖もある馬を連れてくるのだ。しかも騎乗困難な名馬であることが多く、そのことがオルガとサラを悩ませていた。

主や同僚たちの乗馬にするには、あまりに危険である。野に放つことも考えたが、名馬ゆえそれも惜しく、なにより、ひとに危害を与えるだろうそちらの不安の方が大きかった。

結局、主たちの住まいが、豊かな森を抱えるかつて王家の狩猟場であったため、その広大な敷地で放し飼いにすることにした。ところが、結果は思いもよらないことになる。手に負えない危険な馬の一、二を争う二頭が、ふたりの主、フィアナとアルティナに乗馬となってしまった。

「とんでもない！」

オルガを筆頭に、多くのものが口をそろえて反対したが、

「だって、しょうがないでしょう？ 乗れというのだから……」

フィアナとアルティナ、乗り手の意思ではなく、それは馬の意思だった。

ひとの一人や二人は蹴り殺していそうな、見るからに癩気の強い

獰猛なスレイプニルと、傲岸さを内に隠し、思わぬところで獰猛の牙を剥くグレイプニルの二頭の馬は、こともあるうに彼女たちの大事な主を乗り手に選んだのだった。

これで、主の命令に従うならまだ可愛げもあるが、乗っても指示は聞かず、しかも気が向いたときにしか主を乗せない。というだけでは飽き足らず、主が他の馬に乗ることを許さなかった。人と馬の主従関係を逆転させるという、まさにとんでもない二頭だった。

オルガは主から二頭を取り上げたかったが、齒を剥き、前肢を上げて威嚇してくるスレイプニルなど、近づくこともままならない。

『フィアナ様とアルティナ様に傷をつけようものなら、我が身と引き換えにしても必ず始末する』

と、オルガは心ひそかに固く決意したものである。
その決意のほどが相手に伝わったのか、オルガと、この二頭の馬の関係は最悪だった。

スレイプニルとグレイプニル、それだけでもう十分であるのに、ぼつぼつとではあるが、いまだ馬を連れてくる父に、オルガは怒りさえ覚えていた。これ以上、主や同僚の手を煩わせることはできない。オルガとサラで面倒をみるしかなかった。

「まったく、とんでもない馬ばかりよこして。何を考えているのかしら？」

「何も考えてないんじゃない？ 父さんは」

「あー、何か粗相でもして、お役を取り上げてもらえないかしら？」

遠い空を見上げてオルガがいうと、サラも倣うように顔を上げた。

「それくらいで止めるんじゃないでしょう？ 大病にかかるか、刺されでもすれば別でしょうけど」

「そうねえ……」

と、相槌をうちかけたオルガは、勢い首を横に振った。

「ああっ、駄目駄目、いまは駄目よ」

「ああ、そうでしたわね」

「使者としての務めを果たしてもらってからでないと」

「お前たち、いい加減にしてちょうだい」

遠い空を見やっただまま交わされる、侍女姉妹のひどい会話に、たまらず、といった様子でフィアナとアルティナが嘖きだした。

「親のことをそんな風にいうなんて。ほんとうに何かあったらどうするの？」

「何かあれば、心配もしょうが……」

父の姿を思い浮かべているのか、オルガの顔は渋い。

「さようです。われらの父は、死神にも見放されておりますゆえ、多少呪^{まじない}をかけたところでビクともしませんわ」

「大事な娘に面倒を押し付けているのですから、これくらいいいわなければ割に合いません。天上の神々もお許しくださいます」

サラは平然と、オルガは自信たっぷりにいい切った。

「まったく、お前たちは」

諫めることを諦めたフィアナとアルティナは、苦笑いを空に向け

た。

オルガとサラも、同じ空の先を見上げる。澄みわたった空の彼方。その下に、彼女たちの父がいる。

「そろそろ着く頃かしら？」

「そうね、シャンキルを出て十日だから、もう着いてるかもしれないわね」

オルガは答えると、黙ったまま彼方を見つめる主たちに問うた。

「ご心配ですか？」

オルガは、主たちの心の中にあるものを知っている。サラも当然知っていた。

「ご心配は無用です。グレン様は吉報を携えてお戻りになります」

そうかしら？ と深緑の瞳が揺れるのを見て、サラは続けた。

「われらの師がそう決めたのです。覆るがあると思いますか？」

サラのその言葉に、主たちは微笑んだ。

「おふたりは心配などなさらず、ただお待ちになるだけでよいのです」

「さようです。ただし　いい子にしていただかないと、お話は返してしましましてよ」

幼子を脅すようにいうオルガに、フィアナとアルティナは破顔した。

『もちろん、いい子にしてるわ』

「大変結構です。では、そろそろ屋敷に戻りましょうか」

「ええっ、もう?」

「なんです?　いい子にしてくださいさるのではなかったのですか?」

『あら、わたしたちはいつもいい子にしていますよ?』

「いい子であれば、侍女の手を煩わせず、素直にお聞き容れくださるはず。だいたい、目を離すとたちまち姿をくらまして、侍女に心配をかけるなど、とてもいい子とは思えません。まだまだにございます」

「オルガは大きねえ。そんなこと、たまにしかないじゃないの」

「そうよ。この間のは不可抗力だったし」

「ねえ？ それに、オーカーやダブルに比べたら、わたしたちはずいぶんとましでしょう？」

「馬と比べてどうなさいます！」

サラは、長くなりそうな主たちの会話を尻目に、ひとり後片付けに取り掛かった。

1 日常（後書き）

王道恋愛めざしてます。遅筆なため、更新は……遅いことだけは請け合いです。

ああ、書くのって難しい、と実感する日々です。

2 招かれざる客

大陸の北東に位置するバルダ王国は、春とともに西からの使者を迎えた。

「これはなんと……」

「どうやら、時候の挨拶ではないようですな……」

国境沿いの小高い丘で、その来訪を待ち構えていたバルダの宰相と直臣は、驚きを抑えきれずにそういった。

親密というほど深くなく、さりとして、ひと吹きで消えてしまうような、頼りなく浅い付き合いでもない。互いの国を尊重し、一定の距離を保った両国は、年に一、二度、互いに使者を行き交わすことを数十年にわたり続けていた。使者は数十人。バルダに遣わされる使者も、百を超えることはなかった。

それがいま、彼らが目にしているのは、ゆうに三千を越すだろう、軍容を整えた騎兵の一団であった。眼下に見える、西からバルダへ向かう道は、黒に近い灰色の甲冑で埋め尽くされている。訓練が行き届いているに違いない隊列には、一糸の乱れもなかった。

穏やかな春の日差しを不穏な鉄色に変化させる来訪者たちを、バルダの一行は、心中に不安を広げながら眺めていた。

すると、それまで規律を保っていた隊列が、にわかに崩れた。先頭の一団から、四つの影が飛び出す。人馬一体となった四つの塊は、見事な手綱さばきで、一気に丘を駆け上ってきた。

出迎えるバルダの一行は、驚きの覚めやらぬ目で彼らを見つめた。

歩調を緩めた人馬が、バルダの出迎えのもとに近づいてくる。

先頭に並び立つふたりは、目にまぶしい金髪と銀髪の青年であり、続くふたりは、黒髪と赤茶けた頭髮の、威風漂う壮年の男たちであった。

ゆっくり歩を進め、互いの顔が確認できる距離までやってくると、青年たちは馬を止め、後続者たちに道を譲った。壮年の男たちは、金髪と銀髪の青年を脇に従えたかたちで馬を止めた。

バルダの宰相は驚きを通り越し、緊張していた。

己が正面に並び立つ男たちが、だれであるかを、彼は知っていた。四人の中でただひとり、軍装に身を包んだ偉丈夫が、大陸に並ぶものなしといわれる剛勇の将であり、その隣に立つ黒衣黒髪の男が、ひと目見れば忘れられない冷酷な黒の瞳から、黒の宰相と呼ばれていることを。そして彼らが、大陸最大最強の国　レナーテを支える二大柱であることを、彼は知っていたのだった。

準備と覚悟もなく彼らと向き合うことになったバルダの宰相は、固唾を呑んだ。

乾いた唇を押し開く　その前に、レナーテの宰相が引き結んでいた唇を解いた。

「わが名はグレン。レナーテ王国宰相を務めるもの」

まさか……という思いで見つめていたバルダの一行は、息を呑んだ。うろたえ泳ぎそうになる目を堪えるのが、彼らには精一杯だった。

「わが主、国王アルグレイブ陛下の命により、かくは参上いたしました。バルダ国王カルスナム陛下と、王太子ソヴィエ殿下に目どおりしたい」

抑揚に欠けた声は低く重く、有無をいわせぬ力があつた。

バルダの宰相は、いまだ緊張が解けない己の内に、暗い不安が広がっていくのを感じた。

バルダの王都エレヤは、驚きと歓声でもってレナーテの使者を迎え入れた。大陸に響きわたるレナーテ軍の勇壮をひと目見ようと、沿道には多くの人々が集まっている。

バルダの民は軍装の使者を、バルダとレナーテが絆を深めたその証である、と考えたようだった。

無論、そんな事実はない。エレヤの都は喜びに騒いでいたが、王宮内は混乱していた。

「どういうことだ？　これみよがしに兵を率いてくるなど。レナーテは何を考えておるのだ？」

「それも宰相と大將軍、両者揃ってのお出ましだ。ブルヌ宰相が顔をこわばらせておったわ」

「それはそうであろう。聞けば、黒の宰相殿は挨拶もなしにいきなり、陛下と殿下に会わせるとブルヌ殿に迫ったらしいぞ」

「ほう、嬉しくない事実だな。レナーテが驕りを見せるか……」

謁見の間に隣接する控えの間。

急遽そこに集められたバルダの臣たちは、わずかな時間を利用して、情報と心情を交換していた。十を数える男たちは、武人に文人、

年齢も装いも様々である。ただひとつ共通しているのは、彼らはバルダを担う高官たちである、ということだった。一堂に会した彼らは、憚ることなく発言し、状況を見極めようとしていた。

「何をかはわからんが、レナーテがわれらに吞ませようというのは確かなようだな。しかも力づくで」

「少々騒ぎすぎではないか？ たかだか三千ほどの兵で何ができる？」

「うぬは阿呆か？ 目の前にあるのは三千でも、レナーテの本国には十万を越す兵がいることを忘れたか？」

「正確には十一万だな。しかも騎兵だけでな。全軍となると、三十万は固い。そんな相手と事を構えようとするのは、愚かというしかないな。しかし、唯々諾々と従うわけにもいかな。われらにも矜持がある」

「先走るな。どのような話かまだ聞いてもおらぬというのに。レナーテ国王のお人柄は、そなたらも知っておろう。彼の方は、われらに難題を押し付けるようなおひとではない」

「無論、賢王アルグレイブ陛下のことは存じております。だからこそ、ではありませんか？ あの方が、友好国に武威でもって示されるようなことをなさいますかな？」

「さよう。われらの不安はそこにある」

「おひとが変わられたか？」

「賢王といえど、不老不死ではないからな。身体も衰えれば、心も衰えるだろうさ」

「しかし、まだ六十を過ぎたくらいではなかったか？」

「ああ。戴冠四十年の大祭が少し前にあったから、六十二、三であろう」

「六十三にございます」

「まだ老いばれるには早いと思うが……」

「そなた、少しは口を慎め」

「そういわれるが大臣閣下。俺にはそうとしか思えませんし、そうとしかいえませんよ」

「憶測でものをいうでない、というておるのだ」

「それが、そうともいえません」

「……どういうことか？」

「聞くところによると、アルグレイブ国王は大祭の後、離宮を建てられ、住まいをそちらに移されたそうにございます。はずすことのできない式典や場には、王宮に戻られ、姿をあらわされるということです、それ以外のときは、離宮に引きこもっておられるとか……。ご健康に不安がある、と囁かれております」

「ほお、で、政務はどうしているのだ？　と訊くまでもないな」

「黒の宰相か？」

「さようでございます」

「ちっ、予想以上の悪風だ」

と男が毒づいたとき、謁見の間につながる扉が開かれた。

男たちが一斉にそちらを向く。

「……」

控えの間に入室した男は、剣呑な空気と視線を浴びて、一瞬、怯む様子を目元に見せた。が、それを即座にしまいこむと、男たちに告げた。

「お待たせいたしました。準備が整いましてございます。皆様には、謁見の間にお移りいただきますよう」

それを聞いた男たちは、無言でうなずき、立ち上がった。その表情は、濃淡の差こそあれ、いずれも陰しく厳しい。

「バルダとレナーテの関係が変わるか……」

「どう変わるかはわからんが、変わることは確かなようだな」

「正しくは、変えられる、だ」

男たちは控えの間に後にした。

2 招かれざる客（後書き）

3 望みしもの

バルダ王国は、大陸の果ての大国、と呼ばれている。

豊かな森と、大小含めると三百はくだらない数の湖を有するこの国は、その美しさから、『神々の休息の地』ともいわれていた。

美しいだけでなく、そこからもたらされる自然の恵みは、バルダを潤し豊かにしていた。そしてなにより、バルダに恩恵を与えているのは、西の空に、南北に聳え立つセルスカーの山々であった。

ひとの踏破を許さぬ天険は、外からの侵入を阻むだけでなく、内なる野心をも砕いてきた。

地理的なものも大いに関係しているが、バルダは大陸にあつて、勢力を拡大させることもなければ、縮小させることもない、非常に珍しい国であった。彼らは領土の拡大ではなく、豊かな領土を守り、そこで富と力を充実させることに心血を注いできた。

賢明の国である。そして王は堅実であつた。

建国より続くバルダ王家は、傑出した人物こそ出しはしなかったが、国を脅かすような愚昧な王も出さなかった。王家に受け継がれる血が、はたまた教育の賜物か。歴代の王はそれぞれ、篤実であったり、清廉であつたり、地味だが国を守り固めるにふさわしい資質を有していた。

現国王カルスナムも、派手さはないが、冷静で物堅く、必要があれば相応の判断と決断のできる人物であつた。歴代の王たちと同様、領土拡大の野心はない。ただ、内陸の動向には強い関心を持っていた。

時に急速に、時に緩やかに、たえず移ろいゆく内陸の国々の動向を、彼は用心深く見守っていた。自国が内陸の嵐に巻き込まれないよう、心鋭く、目を光らせているが、国王カルスナムの瞳は穏やかで、見るものに安堵を与えていた。そしていまこのときも、呼び寄せた王太子を迎えた国王の濃茶の瞳は穏やかで優しかった。

「ガイはどうしたのだ？」

カルスナムは息子に笑みを向けた。

息子ソヴィエの片側にいるはずの人物がいないことを訊ねたのだが、ソヴィエは母譲りの白皙の美貌に薄い苦笑を浮かべただけだった。

「申し訳ありません」

と頭を下げたのは、常にソヴィエの傍らにあるギルスだった。

「どこへ行ったものやら、行方がわかりません」

広い肩幅のわりに肉付きの薄い長身の青年は、そういつて穏やかな笑みを見せる。

「このような大事なときに、殿下のお側を離れるなど」

「よいではありませんか宰相閣下。此度の会見に、あれは必要ござらん。なにかとuringそうござれば、逆にいなくてよかったというべきでしょう」

国王の隣で苦言を吐くブルヌに、ギルスはそう答えた。

「……まあ、そうであるな」

ブルヌの声を聞いて、カルスナムが笑った。

「そうか、ガイはいらぬか」

王は、気持ちよく同僚を切り捨てた青年に目を向けた。

「此度の会見には不要でございます」

明瞭な声が、抑揚をつけてそういった。

ギルスの返答に含みを感じた王は、笑みをしまった。

「レナーテとの会見に、ガイはいらぬという理由を申せ」

「はっ。わが従兄弟は才乏しい男ではございますが、国を想うこと篤く、王太子殿下を想うは、さらにそれを上回ります。そのような男を同席させるのは非常に危険です」

「それは、ソヴィエの痣のことをいっておるのか？」

カルスナムは息子に目をやった。

王太子の秀麗な顔には、青黒い痣があった。忌まわしい色のそれは、左耳の付け根からあごにかけて広がり、左肩にまで及んでいる。端整な面を覆う痣は、闇が光を侵食するがごとき禍々しさを、見るものに与えるのだった。

「そのような心配は無用である」

王は断言した。

王太子と会ったものは、必ず何かしらの感情を見せる。同情や憐憫、恐怖など、時にあからさまであったり、必死に抑えようとしたり。それはもう、多種多様に感情を見せるのだ。生を受けて以来、それらに晒されてきた王太子は、多少のことでは動じない。傷つく時は、もう過ぎた。

「そうであろう、ソヴィエ」

息子に向けるカルスナムの眼差しは優しく、深い愛情がこもっていた。

ソヴィエは父王に応えるように、目元を和らげた。父譲りの濃茶の瞳と、同色の髪。少し癖のあるその髪は、まるで痣を晒すかのように短い。

忌まわしい痣を与えられながら、心に闇を巢食わせることも、逃げることもしない息子を、王は誇りに思っていた。他国の使者がどのような反応を示そうと、問題はない。加えて、今回の相手は大国レナーテである。

「レナーテの重臣であれば、そなたの心配するようなことにはならんだろう」

「わたくしが心配しているのはそのことではございません」

ギルスは首を横に振った。

「陛下のおっしゃるとおり、レナーテの方々であれば、そちらの心配はないでしょう」

「では、何だというのだ？」

「レナーテが、われらバルダに求めるもの……」

「ギルス、そなたにそれがわかるか？」

「おそらく」

言葉は控えめだが、ギルスの声には自信からくる強さがあつた。
カルスナムは無言で頷き、先を促した。

「閣僚の方々は、領地の割譲か、はたまた兵の要請か、と気を揉んでおられるようですが、レナーテの望みは、ソヴィエ殿下でございましょう」

カルスナムとブルヌが顔を見合わせる。

「何故、そう思う」

王の問いに、ギルスは答えた。

「レナーテは大国でありながら、大欲を抱かぬ常識と良識の国でございませう。どこぞの国と違って、我欲のままに領土を欲する国ではありません」

ギルスの揶揄に、ソヴィエが微笑んだ。

「どこぞの国とは、どこのことだ？」

「茶々をいれるな」

ギルスは凜々しい眉をひそめてソヴィエをけん制すると、頭を下げた。

「失礼しました」

「よい、続けよ」

「色々な噂は飛び交っておりますが、国内は安定しております。いまのところ、周辺諸国にも目立った動きはなく、問題ありません。となると、考えられるのはひとつ。確か、シャンキルの女神には、忘れ形見がいらしはらず」

「婚儀というわけか」

ギルスは深く頷いてみせた。

「陛下のみならず、ソヴィエ殿下をと、ことさら黒の宰相がいわれたのは、そのためでしょう」

「であるうな」

ため息に似た声で、王はそういった。

「大国同士の絆を深める婚儀。喜んでお受けしたいところですが…」

言葉を濁すギルスに、

「断ることはできません」

王は静かにいい切った。

「さよう。断りたくとも、われらは断ることができません。断ることができない以上、先方の申し出を速やかに受け容れることが大事となりましょう。渋り、迷いを見せるは、レナーテの心情を損なうだけで、われらには何の利にもなりません。ガイが要らぬ理由にございます」

「ようわかった」

王は肯くと、ソヴィエに目を移した。

穏やかだった瞳が、厳しい王者のそれになっている。

「ソヴィエ、われらはレナーテの申し出を受けねばならん。承知してくれるな？」

「無論にございます。父上」

声は大きくなかったが、決然と、ソヴィエはいった。
今年二十四歳になるバルダの次代の王は、重責と過酷な試練に遭いながら、心身ともに逞しく成長している。

「ソヴィエ……」

「はい、父上」

しかし、カルスナムはいいかけて口をつぐんでしまった。王ではなく、息子を氣遣うひとりの父親の目で、ソヴィエを見つめる。

「父上」

父王の心情をわかったものか、ソヴィエが口を開いた。

「王者に限らず、上に立つものは迷いを見せてはならぬ。内で迷う
はいいが、決して外に見せてはならぬ、と教わりました。教えてく
ださったのは、父上でございますよ」

「ああ、そうであったな。そうであった」

カルスナムは、内に潜む迷いを振り捨てた。

「陛下、そろそろ謁見の間に向かいませんと」

ブルヌが控えめな声を出した。

「その前に、お願いしたいことがあります」

「なんだ？ いまでなくてはなんなのか？ ギルス」

ブルヌは青年を見上げる。

「はい。陛下、よろしいですか？」

「かまわん。申せ」

承諾を得たギルスは、感謝の礼を示すと、小ぶりの宰相に向き直った。

「これは宰相閣下へのお願いでございます」

「何？　わしか？」

「さよう。閣下には、会見の後、閣僚方々の説得をお願いいたします。ガイは、わたくしが引き受けますれば」

「何？」

まだ、会見より先のことを想像していなかったのだろう、ブルヌの驚きの表情を見て、ギルスは態度と言葉を一変させた。

「じじ様」

と、目に涙みを見せて、ブルヌに顔を寄せる。

「ぼーっとしてはなりませんぞ。われらはレナーテの申し出を受けるのです。閣僚方は陛下と殿下の手前、会見の最中はおとなしくしておられるでしょうが、会見後、彼らは不平不満を噴出させましょう」

ギルスの発言に、ブル又は「うっ」と言葉を詰まらせた。

「よもや、陛下と殿下にその役目を負わせようなどと、じじ様はお考えではないでしょうか？」

凄むギルスに、またもやブル又は声を詰まらせる。

「陛下と殿下は決断し、その責任を負われるのですぞ。われらが雑事を引き受けるは、当然ではありませんか」

「わ、わかっておる」

「それともあれですか？ ガイの方がよろしいか？　じじ様がガイを引き受けてくれるというのなら、俺は喜んで閣僚方の説得にあたりますよ。あやつのことですから、それはもう轟々ねちねちと、じじ様を責めることでしょうか」

「な、何をいう。宰相のわしが閣僚を説得せんでどうする！　ガイはそなたに任せるぞ。よいな？」

そついうと、ブル又は逃げるように執務室の扉に向かった。

「承知つかまつりました、宰相閣下」

ギルスは端整な面に笑みを浮かべ、深々と頭を下げた。

「ブルヌ、良い孫を持ったな」

「とんでもございません！ 賢しくうるさいだけの孫にございます
！」

カルスナムの笑聲に、ブルヌは半ば謙遜、半ば本気で首を振った。

4 会見

謁見の間は、白の間ともいわれる。

白塗りの壁に天井。床には白大理石が敷き詰められ、上下二段に大きくとられた窓から差し込む外光が、さらにその白さを輝かせる。調度品も白を基調としたもので統一されており、唯一あるのは、太い柱に走る数本の細い青だけであった。

白はセルスカーの頂にある万年雪を、澄んだ青は、セルスカーの空をあらわしている。セルスカーの清冽な白と青は、バルダの色であり、気質の象徴でもあった。

まぶしいほどの白さでもって、来入者を驚かせる謁見の間では、すでにバルダの高官たちが、いまや遅しと、レナーテの使者たちを待ち構えていた。ついさきほど国王と王太子を迎え入れ、バルダの人員は揃っていた。

窓を背に並び立つ十名の高官たちは堂々と胸を張り、

唯々諾々と従ってなるものか

と見えない気炎をあげている。氣勢も前のめりに、顎をあげる高官たちは、目だけをわずかに動かして、前に座る主たちの様子を伺っていた。

主たちの様子はいつもと変わらなかった。

一緒に入室してきた宰相はなにやら難しい顔をしていたが、王と王太子は高ぶるでなし、恐れるでもなし、緊張の色さえ見せず、普段どおりの穏やかさと静けさであらわれたのだった。

会見に臨むにあたり、王からなにか言葉があるだろうと思っていたがそれもなく、高官たちは安堵と若干の肩透かしをくらっていた。

（どういうことか？）

（頼もしいではないか）

（内々に話があったのか？）

高官たちがそれぞれ目にものをいわせている間に、レナーテの来訪が告げられた。

男たちは姿勢を正し、視線を扉に向けた。

レナーテの使者たちは、入室すると一様に目を細めた。

だがそれはほんのひと時のことで、室内のまぶしさを過ごした彼らは、憎らしいほどの落ち着きと、悪口を叩く隙もない完璧な礼でもって、バルダの前にあらわれた。

「掛けられよ」

カルスナムが座を勧めると、ふたりの男が肯首し、バルダの君主と向かい合う席に着座した。

残りのものは彼らより一歩下がった場所から動かず、両脇に置いていた手を、その場で後ろ手に組み変えただけだった。自国の重臣を守護するように立つのは、みごとな金髪と銀髪の、見目良い青年たちだった。会見に臨むレナーテの人間は、わずか四人だった。

バルダ側は、高官、廷臣だけでも二十名を越す。加えてその大多数が悪感情を抱き、無言ではあるが、それを隠そうともしない表情と眼差しを彼らに向けている。というのに、レナーテの使者たちは一切感情を見せなかった。

まだ二十代半ばと思われる青年たちの若さと人目を引く容姿から、

（派手な飾りか……）

とバルダの高官たちは思ったが、彼らはその印象をすぐさま捨てた。

正面から向き合う形になった青年たちは、多くの視線に晒されながら、決して無表情を崩さない。そのくせ目には力があつた。均整のとれた身体を適度な緊張感に包み立つ彼らは、成り行き次第でいかようにも心身を変化させられる。そんな余地すら見せていた。

年に似合わぬ余裕をかもし出す青年たちの前には、レナーテが誇

る将と宰相が並んで座っている。それぞれが武人文人の最高位にある彼らは、自然体でいながら、並みならぬ威厳でその場を圧していた。

レナーテ軍の頂点に立つ大將軍ロングバルトの威風は、いうに及ばず。文官でありながら、それに負けない威を放つのが、レナーテの宰相グレンだった。その姿には、武人の強さがある。横に座るロングバルトに見劣りしない体軀は逞しく、黒の長衣が精悍さを引き立てていた。

グレンが切れ長の目で、バルダの高官たちをひと撫でした。

冷たい視線を向けられたバルダの高官たちは、眉間に険しさを見せたが、グレンは無表情のまま、視線を真正面に据えた。そこには、バルダ国王カルスナムがいる。

おもむろに、グレンが口を開いた。

「レナーテ王国宰相グレンにござる。こちらは」

「ロングバルトでござる」

絶妙な間で、ロングバルトが割り入った。

グレンがかすかに眉を顰め、ロングバルトを見る。

ロングバルトは口の端をわずかに上げると、すぐにそ知らぬ顔を決め込んだ。

グレンは何事もなかったように、視線を国王カルスナムに戻した。

「此度は、国王アルグレイブ陛下の命により、臣らが参りました」

それだけをいうと、彼はカルスナムを見つめたまま、それ以上何もいおうとしなかった。

しばしの沈黙の後。

「して、用件は？」

カルスナムが水を向けた。

この言葉を待っていたのか、グレンは深く頷くと、視線をカルスナムから王太子ソヴィエに移した。

「アルグレイブ陛下より、王太子ソヴィエ殿下への言伝でござる」

バルダの高官たちの顔に、怪訝の色が広がる。
グレンはいった。

「レナーテの至宝を、殿下にお譲りいたす」

（レナーテの至宝？）

謁見の間は、声のないざわめきに揺れた。

領土が金か人間か　いずれかをもぎ取られるか、差し出すことを強要されると信じて疑わなかったバルダの高官たちは、虚を突かれた。

奪われるのではなく、なにやられるという。

しかし、『レナーテの至宝』というのが、彼らにはわからない。比喻であることはわかったが、それが土地なのか権利なのか、人なのか物なのか、突然掛け金をはずされた状態の頭では、情報が騒がしく空回りするだけで、これというものが見つからない。

バルダの高官たちは、至宝が何を指すのか、答えを探すように目を見合わせた。だが、見返す目には同様の疑問があるばかりで、答えはない。一部、答えを見つけたものもいたようだが、彼らはそれぞれ考えに沈んでいるようで、視線を寄こさなかった。そんなとき、

「ありがたく頂戴いたします」

ソヴィエの声を聞いて、彼らは驚いた。

レナーテの使者たちにも、王太子の返事は意外なことのようにだった。無表情だった彼らが、表情を見せた。

軽く目を見張る青年たち。ロングバルトは眼差しを落とし、口角を上げており、その隣では、グレンが切れ長の目を細め、あるかなしかの微笑を口元にのぼらせていた。

「わが主も喜びましょう」

グレンが頭を下げた。

「したが、どちらのお方か？」

カルスナムが問いかける。

とまどう高官たちを置き去りにして話は進んでいくかにみえたが、カルスナムの次の言葉で、彼らはレナーテの至宝が何であるかを知った。

「シャンキルの女神の忘れ形見は、確か、お二方いらしたように思うが」

バルダの高官たちが驚きに目を見張る、と同時に、グレンが口元の笑みを濃くした。

「さよう、忘れ形見はおふたりにござる。ソヴィエ殿下にはアルテ
イナ様をと、主は申しておりますた」

4 会見（後書き）

5 後の嵐

「宰相閣下、此度の話は内々に進められていたのでござるか？」

ギルスの危惧したとおり、高官たちは不平をぶつけてきた。

レナーテとの会見は、身内の疑念を呼ぶほどに、滞りなく速やかに終了した。

バルダの快諾を得たレナーテの使者たちは、余談に花を咲かせることもなく早々に引き上げ、カルスナムとソヴィエも謁見の間を後にしている。

ここまではギルスの思惑通りだったが、ギルス本人がこの場から逃げ遅れてしまった。

まいったな

ギルスは心中で呟きながら、席をはずす機会をうかがっていた。

「それはあるまい。内々で話が決まっていれば、使者のやり取りをすれば済むだけのこと。あのように武を誇示するようなあからさまなやり方はすまいよ」

「しかし、陛下と殿下はわかっておられたな。でなければ即答できまい」

「ギルス、そなたもわかっていたのであろう？」

「気配を殺していたギルスであつたが、嵩高い　と従兄弟から嫌味を込めていわれる彼の身体は、人目から隠せるはずもなかった。厳しい視線を向けられたギルスは諦め、レナーテの目的に見当をつけ受諾を進言したことを、正直に話した。

あからさまに不満を見せるものはいなかったが、咎めるような目がいくつかあつた。

「お主の目の良さはわかつている。確かなこともな。だがな、このことは、いま少し時間をかけて考える必要があつたのではないか？」

わしはそう思う　といったのは、バルダの老將軍プラスバだった。若くから賢將と呼ばれ、六十五歳を過ぎたいまも、退くことを許されず、バルダの軍権を握る人物である。

彼は、ギルスたちの祖父であるブルヌと親交があり、ギルスにも目をかけてくれる。ひよつとしたら、この老將軍が理解を示し援護してくれるのではないかとギルスは淡い期待を抱いていたが、甘かつたと思い知らされた。その上、この場から逃げる機会を完全に失った。

ギルスは腹をくくつた。

「閣僚諸将の方々に、ご説明とご理解を求める時間がなく、かようなことになってしまったのはお詫びいたします。しかしながら、先も申し上げたとおり、われらには選択の余地がございませんでした。レナーテがあのような武威を見せるのは、断つてくれるなという意

思表示でありましょう。ごねて時間を稼ぐことはできても、結果を変えることはできません。変えるためには、それこそ多大な犠牲を払うことになりましょう」

ギルスの声で、高官たちは静かに現実を見つめる。

「かつて、われらバルダとレナーテの国力には、そう差はございませんでした。ですがいま、その差は歴然としております。それでも従うを好しとせず、誇り高きバルダの民として、大国に立ち向かわれますか？」

顔をしかめる諸将たちに、ギルスはさらに続ける。

「レナーテが無理難題を示すのであれば、わたくしも剣を抜くことにためらいはありません。しかし、ことこの件に関しては、やり方はさておき、犠牲を払ってまで拒否しなければならぬことでしょうか？」

「わかっておる。わかっておるよ、ギルス」

老将軍が白い頭を揺らした。その声は穏やかで、次第に熱を帯びるギルスの声と感情を優しくくるむ。

ギルスは息を吸い、我知らず高まっていた感情を落ち着けて、老将軍の声に耳を傾けた。

「もはや決定されたこと。王太子殿下が承諾し、陛下もそれを了承された。われらが何をいおうと事態は変わらんし、変えられん。だがな、いわずにはおれんのだ、ギルス」

それは、ギルスにいいながら、他の高官たちにいい聞かせているようでもあった。

「ソヴィエ殿下は、お幸せになれるのであろうか？」

ギルスは答えることができなかった。

王宮の自室に戻ったギルスは、長椅子に腰を下ろし、脚をテーブルの上に投げ出した。体はまったく疲れていないというのに、ひどく疲弊していた。

きつく目を閉じる。

しかし、心が休まることはない。逆に、乱れ騒ぐという好ましくない事態を招いてしまった。老將軍の言葉に、ギルスは打ちのめさ

れていた。

ソヴィエ殿下は、お幸せになれるのであろうか

幸せになつてもらいたい。それは強く願っているし、心の底から思っている。が、幸せになれるかどうかはまったく自信がない。婚儀に関していえば、一筋の光さえ見えないのだ。腹の立つことに、不安要素だけは山ほどあった。

ソヴィエ個人が犠牲になることで、国に利がもたらされるのであれば、まだ納得もできる。だが、それすら確かではない。

「できるものなら突き返してやるさ」

思わず口から出た言葉に、返事が返ってきた。

「返しにいくなら、俺も一緒に行つてやるぞ」

声のする方角に顔を向けたギルスは、眉根を寄せた。

いつの間に入り込んだのか、ひとりの青年が、壁に背中を預けるようにして立っていた。嫌味なほど整った顔に、微笑を浮かべている。

立ち姿も画になる青年は、足元に落としていた視線を拾い上げるといった。

「従兄弟のよしみでな」

ギルスは内心で舌打ちをした。

いま最も会いたくない人物、それは従兄弟のガイだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1249w/>

神々の賽 ～ 対の女神 ～

2012年1月10日21時49分発行